

説教題「この最後の者にも」
マタイによる福音書20章1～16節

ご紹介にあずかりました青木です。

先ほど、お読みいただいたマタイ20:1-16、これは、イエスキリストが語った、たとえ話です。

イエスは、たとえ話を通して、
天の国とは、こういうものなんだよ、つまり、神さまってのは、こういう世界を私たちに提案してくれているよ、神さまは、こんなに嬉しい関係を私たちに起こしてくださるんだよ、そのように、イエスは、たとえ話を通して語っています。

早速、このたとえ話を考えてみましょう。

ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために夜明けに出かけて行き、一日1デナリオンの約束で、労働者をぶどう園で働かせます。次に主人は、朝9時に出かけて行き、一日1デナリオンの約束で労働者をぶどう園に送ります。さらに、お昼の12時、3時、5時にも出かけて行き、同じ1デナリオンの約束で、ぶどう園で働かせます。

そして、一日の仕事が終わり、賃金を支払う場面、9節にありますが、夕方の5時から働いた人にも、午後3時から働いた人にも、昼12時、朝9時、そして、夜明けから働いた人にも、同じ1デナリオンの賃金を支払ったというストーリーです。

このイエスのたとえ話、読むたびに私思わされることがあるのですがけれども、この設定や登場人物というのは、現代の日本各地にある「寄せ場」とか「飯場」と言われる、日雇い労働者たちが今日1日の仕事を求めて集まる地域、大阪の西成、通称釜ヶ崎、ですとか、名古屋のささしま、東京の山谷、横浜の寿、など、で起こっている風景、人々、そのもの、だと思ふのです。

今から40年以上も前、私が大学生の時、大阪の西成にある寄せ場で、ホームレス支援活動に参加していました。

で、今日のたとえ話を読むたびに、その40年前当時の西成のふ情景が頭に浮かぶのです。

毎朝、夜明けの時間、朝5時ごろに、多くの日雇い労働者たちがJRの今宮駅前にある、あいりん労働福祉センターという公共の職業紹介所に、その日の仕事を求めて、集まってきます。

このあいりん労働福祉センターは老朽化のため2019年に閉鎖されましたが、でも私が大学時代には、毎朝、明け方、その日の仕事を求めて大勢の日雇い労働者がそこに殺到をする。でも集まる日大勢の人たち全てに紹介する仕事ないですから、仕事にあぶれた人たちは、今度は手配師と呼ばれる仲介役と交渉をして、作業現場に向かう車に乗り込んでいくんです、

けれどもですね、

真っ先に仕事が決まるのは、たいてい若い人たち、体が大きくて、丈夫そうで、仕事ができそうな人たち、しかし一方で、肉体労働に耐えられなさそうな、年配だったり、体の弱そうな人たち、障がいを持っていたり、病気であったりする人たちは、仕事を求めて申し出をしても、最後の最後まで声をかけられない、そして、仕事にあぶれた彼らは、所在なく、ひなが空腹を抱え、その周辺で過ごし野宿をする、というのが当時の西成、通称釜ヶ崎の町の様子でありました。

そのことに思い馳せつつ、もう一度、聖書のイエスのたとえ話に戻ってみましょう。

ぶどう園の主人は、明け方に引き続き、朝9時に労働者を雇いますが、朝9時は明け方に比べるとかなり遅い時間で、でも主人が広場に行ってみると、3節、何もしないで広場に立っている人々がいた、とあります。

立っているというのは、先ほど言いました、いろんな理由で労働には耐えられそうにないだろうと雇われずに仕事にあぶれた人たち、それは12時、3時、5時に立っていた人たちもそうなのでありましょう。

夕方5時に雇われた人が、なぜ何もしないで一日中ここに立っているのかという主人の問いに、7節で答えています。

「誰も雇ってくれないのです」

「誰も雇ってくれなかった、仕事がしたくてもできない、立ちん坊」の人たち、今日一日どうやって凌いでいくか途方に暮れる人たちの姿なんです。

しかし、主人は、仕事にあぶれた立ちん坊の人たち全てに声をかけて仕事をしってもらう、そして、仕事が終わった後で、当時の肉体労働者の一日分の賃金、一日分の生活費、でもある1デナリオンを全員に支払ったというのです。

イエスは、このたとえ話を通して、私たちに提案しているのだらうと思います。

神さまってのはね、夜明けから働いた人にも、仕事にあぶれ夕方になって今日の飯をどうしようと途方に暮れている人にも、みんなに今日一日分の糧を与えようとされている、

誰しもが今日一日、無事に過す生活が保障される社会を望まれている、そういう関係、そういう嬉しい世界が私たちの前には開かれているんだ。

それは、14節で主人が語る、「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたい」という言葉に凝縮されている、天の国、すなわち神が望まれる希望の世界なのであります。

何もしていない人が何がしかをしている自分と同じ評価なんておかしい、たくさん仕事をこなした方がしていない人より多くもらうのは当たり前だ、そのような、成果主義、能力主義だけで人の価値を測ってしまいがちな世の中であって、

いき年生きる者全て、「人」として生きる権利が守られていく、命の尊厳が認められていく、そういう社会になること、そこにみんなが希望を置くことができたら、どんなに素晴らしいことか、

そして、私や皆さんも含め、最後の一人も、今日一日過ごす糧と希望が与えられる、神が望むそのような社会づくり、関係づくりに参与していくことができたら、どんなに素晴らしいことなのか、そう思われるのであります。